犬山5兄弟、それぞれの陵辱

＜目次＞

1. キャバクラ嬢　しおり～

犬山家　次男　真司36歳　（緩めな女の子のゲームテイスト風）

2. ナンパ　のぞみ～

犬山家　三男　真也30歳　（明るめな女の子のナンパテイスト風）

3. 大学生　しずな～

犬山家　四男　真吉22歳　（冷静な女の子のレイプテイスト風）

4. バイト　かおる～

犬山家　長男　真一42歳　（清楚な女の子の初めてテイスト風）

5. 同級生　ひとみ～

犬山家　五男　真吾18歳　（勝気な女の子のラブテイスト風）

1. キャバクラ嬢　しおり～

「しおりちゃんさ。きょ～は、付き合ってよ。ね、いいでしょう？」

「えー、もう犬山さんは、すぐそれだから。何気に言ってるようにしてるんだろうけど、最近ふた言目には、そればっかりだから」

呆れた顔で、グラスについた水滴をようやく拭きながら、しおりはコースターの上にグラスを置いた。

「いやいや、ひと言目から言ってるつもりなんだけど」

「アホ」

　この1週間で犬山真司は、4回しおりを指名。

彼女は、2週間前に入店した高校を卒業したばかりの新人嬢だ。

こんな子とうまいタイミングで会えるなんてなかなかないと思った真司は、散財しても通い詰めている。

　「ほら、同伴もしてるし、かなり通ってるじゃん。俺の頼み聞いてくれてもいいじゃんかあ」

拗ねて身体をソファに横倒しする。

「ちょっとお、そんな子どもみたいなことすると、ひっかくよお。ほら飲んで飲んで」

しおりは、グラスを持ち上げて彼の口元に運び、軽く真司の太ももを叩いた。

「じゃあ、食事は？」

「もう、人の話聞いてないでしょ、赤ちゃん」

「おっ。その呼び方イイ。それで行こう。しおママ～」

「だれがママだ」

苦笑いでいなすしおりだが、真司には彼女を落とす自信があった。

「じゃ、そういうことで、犬をママが散歩するということで、夜の街に繰り出しますかあ」

「散歩？なにそれ」

「ペットの犬を深夜に散歩するマダムが流行ってるの知らない？最強だよ。新宿の夜の海を泳ぐ魚たちに食らいついて離さないの」

「‥犬山さん、ときどき何を言ってるかわからないんだよ」

「まっ。わからないままでいいんじゃない。どうせ、俺は誰からも理解されない思考回路の男って言われて数十年生きてきたんだ」

「数十年？数百年の間違いじゃないの？あははは」

こんな調子で、二人の会話はいつも弾む。

だから、真司としては自信があるのだ。

　彼女は足がすごくキレイなのに、ミニスカートを履かない。

前にスリットの入った服を着てきたことがあった。

そこから覗く太ももに、犬山真司の目は釘付けになった。

「聞いてます？あたしの話」

「あ？え？聞いてるよ」

「うそっ、あたしのココ見てましたよね」

しおりが、自分のスリットの裾を指で摘んで見せた。

「見てないよ」

「絶対見てました」

いじめてくる。

「だって、しおりちゃんの足さ、すごいキレイなんだもん。こんなキレイなら、ミニとか履けばいいのにって思ってた」

「えー、そんなキレイじゃありませんよ」

と裾を直す。

そんな通い立ての頃は、しおりも接客に慣れていなかったし、犬山真司もまだ常連客として認識してもらえなかった。

仕事仕事した物言いだったが、今は違う。

しおりは、かなり可愛いく初々しいので、すぐに人気がでるだろう。

もう真司のお金もあそこも限界だった。

「お願いだからあ～ね？」

「えー、ここで話してるからいいじゃん」

しおりに向き直って

「前に言ったけどさ、綺麗なものを見てると、すっごい癒されるんだ。しおりちゃんのこと見てるとほんとにそう感じる。だからもっと癒されてたいんだ。時間が短すぎて…ほんとずっと見てたい…ほんとに」

と熱を込めて語った。

笑顔で聞いていたしおりは

「もう…犬山さんうまいんだから。じゃあ、いいよ」

「ほんとに？マジで？」

身を乗り出す犬山真司。

「犬山さん、たくさん通ってくれてるし、これからも通ってくれそうだからね。えへ」

「うんうん、通います。しおりちゃん、絶対NO1になれるから」

「別にいいよ、NO1になれなくっても。ってか無理だし」

「そんなことない。2週間で俺以外からもかなり指名受けてるのしってるし」

「たまたまだよ。新人だしね」

しおりは、ほんとうに人気が出てきた。

犬山真司がいるときは、かならず場内指名が入る。

一度は話してそばにおいて置きたい、と思わせる容姿だった。

真司は、しおりをずっとほめまくった。

そうすることで、彼女の気持ちをこちらに向けさせる。

本当は NO1なんかになれるわけがない。

グラスの水滴をすかさず拭いたり、灰皿のタバコが一本でも片したり、テーブル上を常に整理したり、という接客対応がおざなりだった。

最初にそれをしっかり叩き込んでおかないと身につかない。

人は自分が気楽に過ごせる空間が好きだし、そういうのを知らず知らずのうちに作り出そうとする。

いちいち煩くマナーに目くじら立てず、気楽に話しかける真司の術中に、彼女は嵌っていた。

新人の時にこれをやっておくと、居心地の良い客を気に入るのだ。

見ている客は見ている。

NO クラスのお姉さんは、もっと太い客の心をつかむために、自分の居心地の良さの前に、客の気持ちを優先して接客する。

バイト感覚の小娘は、そこのところがわからないのだ。

だからこそ、甘言にふらっとなってしまう。

　考える時間を与えずに、犬山真司は待ち合わせの時間と場所をすぐに決めた。

「アフターは初めてだから、よくわかんないんだよね」

と渋っていたが、強引に約束。

午前零時になって、真司は会計を済まし外に出た。

　約束の1時になっても、しおりが現れない。

池袋のバーを指定していたから、待つのは苦ではないが、どうしたのだろう？

少しいらいらとしてくる。

携帯がそのとき鳴った。